第一章　紅梅大納言家の物語　娘たちの結婚を思案

［第一段　按察使大納言家の家族］

*そのころ(ところで今の)、*按察使大納言と聞こゆるは(按察使大納言と申し上げる方は)、故致仕の大臣の二郎なり(故藤原大臣殿の次男です)。　*「そのころ」の「その」は前巻末の時点を指すのではなく、「故致仕の大臣の二郎」なるが「按察使大納言と聞こゆる」という時点を＜今のこと＞と示す言い方らしく、つまりは「そのころ」は＜ところで＞くらいの副詞的な話題転換語用のようだ。注には＜『集成』は「漠然と時を指定する書き方。物語の冒頭の形式「今は昔」「昔」などに准ずるもので、後の橋姫、宿木、手習に同じ書き出しが見られる」。『完訳』は「語り出しの常套句。後文から、前巻より三、四年後と分る」。『新大系』は「匂宮巻と同じころで、夕霧右大臣の時代。「その比」で始まる巻として、他に橋姫・宿木・手習巻があり、続篇物語の際立った特徴。前帖に対して全く新しい人間関係の提示の際の常套句」と注す。＞とある。が、注には薫君や匂宮の年齢の明示はなく、むしろウィキペディアの年立て表を参照して、当巻は薫君 24 歳の時の話というのが通説らしく、ざっとそれくらいに思って読もうかとは思うが、前巻の匂兵部卿巻でさえ粗筋で終わった感が強く、物語られた場面を追体験する味わいはほぼ無く、当時の事情や生活感を知らない現代人にとって、この女房語りの文意を得るには、登場人物の年齢設定は決定的に重要であり、一定の場面想定無しに文字を追うのは不毛なので、「後文から、前巻より三、四年後と分る」という不十分な説明では混乱が予期されて、誠に遺憾だ(※)。　※前回ノートに於いてさえ、この冒頭から「遺憾」と不満を示している。で、今回は竹河巻の読後に再読しているワケだが、竹河巻五章一段に薫君の中納言昇進が 23 歳の秋と語られ、同三段に匂宮巻二章七段の「賭弓の還饗」が同年一月の催事であった事が触れられていて、匂宮巻での薫宰相中将と当紅梅巻での薫中納言との地位の違いがあるものの、この紅梅巻は匂宮巻二章七段との繋がりは時系列では実は順当に前年に次ぐ翌年の話となっているのであり、「後文から、前巻より三、四年後と分る」という『完訳』の指摘は如何にも中途半端だ。そして、このことから、匂宮巻と当紅梅巻との間には薫君が宰相中将から中納言に昇進する間の話の巻が順序立てられるべきことが分かってくる。巻序が整理し直されれば、この「そのころ」は通常の指示語として上の話題を受けた＜同時期＞として読めるのかも知れない。この紅梅巻の正しい巻序は、私には今現在は不明だが、第 42 巻目の匂宮巻で続編が始まるのは良いとして、続く 43 巻は竹河巻になるのが、物語の時系列上も、事象展開上も、全体構想に適うものだろう。また、竹河巻は玉鬘邸の悪御達の語りという異色の演出で独立性が高く、と同時に別視点で物語を概観していて、主に玉鬘家の事情を語りながら、匂宮巻で語られた光君死後の粗筋を補完しているような効果が在り、その意味からも竹河巻が匂宮巻に次いで、続編に付いての凡その周辺事情説明が為される、という巻立てこそが正しい、と私は思う。(2013.2.7.)　*「按察使(あぜち)」は＜719 年、地方行政監察のために数国を単位として置かれた令外官(りようげのかん)。のち、陸奥(むつ)・出羽の二国を残し、名義だけとなって大・中納言や参議の兼任となった。あんさつし。＞と大辞林にある。「あぜちのだいなごん」という呼び方は、しかし藤原家にあっては受領を束ねるという実勢を意味していたかに聞こえる。ただし、それは荘園領主としてだから、確かに官職としては名目上ということなのだろう。

亡せたまひにし右衛門督のさしつぎよ(亡くなった藤原長子の右衛門督の弟ですねえ)。*童よりらうらうじう(子供の頃から出来が良く)、はなやかなる心ばへものしたまひし人にて(風雅に長じた性格でいらっしゃった人なので)、なりのぼりたまふ年月に添へて(出世なさり年を重ねるほど)、まいていと世にあるかひあり(ますます威勢が付いて)、あらまほしうもてなし(十分な給金を得て)、*御おぼえいとやむごとなかりける(帝の御信頼もとても厚いのでした)。　*「わらは

より」は注に＜「賢木」巻に初登場、以後、「行幸」「夕霧」巻にも登場。＞とある。賢木巻六章三段の韻塞ぎの負けわざの接待場面で、この藤原二郎君は「中将の御子の、今年初めて殿上する、八つ、九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり」と印象深く登場していた。光君25歳の夏のことで、ということは今の源殿が4歳の時のことであり、この二郎君は源殿の4、5歳年上という勘定になる。今のところ、この話の時点で源殿を50歳と想定しているので、この藤原二郎君はその5歳上の55歳と見て置く。賢木巻の話は、もう46年前の事になるワケだ。因みに、亡くなった藤原一郎君は存命なら56歳くらいの見当。　*「御おぼえ」は注に＜帝の御信望。＞とある。「御（おおん）」は貴人に対する尊敬語だが、特に特定の貴人を対象としない絶対敬意は＜帝＞に向けられる、ということらしい。

北の方二人ものしたまひしを（奥方を二人お持ちでいらしたが）、もとよりのは亡くなりたまひて（最初の奥方はお亡くなりになって）、今ものしたまふは（今いらっしゃるのは）、*後の太政大臣の御女（のちのおほきおとどのおおんむすめ、故藤原殿の後任の太政大臣の娘御の）、*真木柱離れがたくしたまひし君を（親の離婚で母方の実家である式部卿宮邸に移る際に生家の真木柱を離れ難くなさっていらした姫君を）、*式部卿宮にて（式部卿宮家の姫という王家格で）、*故兵部卿親王にあはせたてまつりたまへりしを（故兵部卿親王に嫁ぎ入れ差し上げなさったのを）、親王亡せたまひてのち（夫の親王が亡くなった後に）、忍びつつ通ひたまひしかど（この藤原大納言殿が人目を忍んで通いなさっていたが）、年月経れば（それが何年にもなる内に）、えさしも憚りたまはぬなめり（然して人目も憚らぬようになったようです）。　*「後の太政大臣」と行き成り言われても誰のことか判然としないが、と言っても、源殿の上にいたのは藤原右家の大臣殿なので、察しは付くが、むしろ「真木柱離れがたくしたまひし君」を「御女」に持っていた、ということで、この「後の太政大臣」が玉鬘の夫の藤原左大臣のことと知れる。注には＜鬚黒。彼の太政大臣への昇進と死去の年月は不明。＞とある。が、この時点では「死去」までは分からない。存命なら66歳くらいの筈だ。　*「真木柱」の奥方は46歳になる勘定。ところで、この「真木柱」は藤原右家筆頭家の息女であり、母は宮筋の式部卿宮女という血統の良さだ。母が夫の不貞に精神異常を来たし、離縁して実家の宮家に戻り、その母の連れ子として式部卿宮家で育てられた。本来なら、有力な帝妃候補で、桐壺帝の弘徽殿女御ばりの権勢を誇っても可変しくなく、后位も窺えたような出自の女だ。が、母の錯乱で人生が変わった。が、それにも関わらず、というか、それだからかも知れないが、藤原右家らしからぬ控え目な印象で、とは言え、素直で自分の感性を隠さない所は藤原血筋かも知れないが、むしろ、式部卿宮筋の、ということは藤壺宮筋の、ということは紫の上筋の、質の高い人品を有していた、ようにも思われる魅力的な存在だ。　*「式部卿宮」は真木柱姫君の祖父宮で故紫の上の実父でもあるが、存命なら85歳という当時なら珍しいほどの高齢で、恐らくは故人なのだろうが、その生死については何も語られていない、と思う。　*「故兵部卿親王」は光君の弟宮だが、故人である事は初見かと思う。存命なら67歳くらいの筈だ。

*御子は（大納言の御子様は）、故北の方の御腹に（亡き前妻腹に）、二人のみぞおはしければ（女君が二人だけいらっしゃったが）、さうざうしとて（後継が案じられて）、神仏に祈りて、今の御腹にぞ（神仏に願って今の奥方に）、*男君一人まうけたまへる（男君を一人儲けていらっしゃいました）。　*「みこ」を「御子」と表記してあった場合は男女が分からない。「皇子」なら男だし、「皇女」なら女だが、王家でなければ「皇子」や「皇女」とは言えない。当然、平仮名で「みこ」とあっても男女は不明だが、此処では「さうざうしとて」以下に＜男君一人＞を儲けた、と記されているので、その文脈から「御子」が＜女君＞だと知れる。注には「二人のみぞ」を＜大君（麗景殿女御）と中の君。＞との説明があるが、それは先読みとの整合性の確認なので、此処で明示できるのは「御子」が＜女＞だということだけだ。　*「男君一人」は注に＜大夫の君と呼称される。＞とある。

是も後帖先読みでの記述との整合性の確認のための注釈だが、後にこの人物がどこかで登場場面の有りそうな事だけは窺える。ただ、「大夫」は「たいふ」なら＜五位（昇殿を許される者の最下位）の者＞の意で、「だいぶ」なら＜律令制で、職（しき）および坊の長官。「右京―」「東宮―」＞と大辞泉にあるので、「大夫の君」だけでは正体不明だ。

*故宮の御方に（真木柱の奥方は前夫の故兵部卿宮との間に）、*女君一所おはす（女君を一人設けていらっしゃいます）。　*「故宮の御方（こみやのおおんかた）」は注に＜故蛍兵部卿宮と真木柱姫君との間に。＞とある。故蛍兵部卿宮と真木柱姫との結婚は若菜下巻一章四段に語られていたが、ざっと 29 年前の話かと思う。となると、その二人の間に設けたという「女君」は何歳くらいなのか。親王の死去が何年前なのかが分かれば（※）、この「女君」の年齢幅も狭まるし、「男君」の年齢も類推し易い。尤も、後であっさり明示されるのかもしれないが、真木柱が 46 歳くらいになっている筈なので、何れにしても「男君」は 30 歳代半ばの当時としては可也な高齢出産だったように見える。　※竹河巻五章三段に、薫君 23 歳で匂宮 24 歳の時の話として、玉鬘が「故宮亡せたまひて、ほどもなく、この大臣の通ひたまひしほどを、いとあはつけいやうに、世人はもどくなりしかど、かくてものしたまふも、さすがなる方にめやすかりけり」と述懐する場面があって、匂宮が元服後に故宮から兵部卿職を継いでいることから、匂宮元服を 12 年前と考えて、故宮の死期を 13 年前と推量してみたが、その延長で考えれば、真木柱と藤殿との再婚は 11 年前くらいで、「男君」も 11 歳ほど、という計算になる。（2013.2.7.）　*「女君一所」は注に＜宮の御方と呼称される。＞とある。一気に登場人物が増えた印象だ。尤もこの大納言家は、藤原家の家格としては源婿殿を長として立てているものの、それは極論すれば政治的利用であり、血筋としては長子亡き今や、この人が左家の筆頭にあるわけで、一族郎党の期待は実質ではこの人に向けられている、かと思う。

隔てわかず（双方の連れ子たちと二人の間の実子とを、分け隔てすること無く）、いづれをも同じごと（どの子たちも同じように）、思ひきこえ交はしたまへるを（大納言夫婦は思い申し合っていらっしゃったが）、おのおの御方の人などは（それぞれの御子付きの女房たちなどは）、うるはしうもあらぬ心ばへうちまじり（表面を装うことも無しに張り合う気持も見せて）、*なまくねくねしきことも出で来る時々あれど（底意地の悪い嫌がらせなどがあることも時々あるが）、北の方、いと晴れ晴れしく今めきたる人にて（奥方は明朗で社交性に長けた人なので）、罪なく取りなし（罪咎めを追求して尾を引くような事が無いように取り計らって）、わが御方ざまに苦しかるべきことをも（自分の連れ子が邪険にされても）、なだらかに聞きなし（穏やかに聞き流して）、思ひ直したまへば（気を取り直して明るくしていらっしゃったので）、聞きにくからでめやすかりけり（世間に聞き難い家庭内不和の噂を立てられることもなく御夫婦仲は円満でした）。　*「なまくねくねし」は＜なんともひねくれた＞くらいの言い方だろうか。そのままでも現代語として語感は伝わる気がするが、中身の客観的な説明には欠ける女房言葉に聞こえる。

［第二段　按察使大納言家の三姫君］

君たち（姫君たちは）、同じほどに（同じ年頃で）、すぎすぎおとなびたまひぬれば（つぎつぎと御成人なさったので）、御裳など着せたてまつりたまふ（大納言はそれぞれに御裳着の儀を上げて差し上げなさいました）。

*七間の寝殿（大納言家の寝殿を七間間口に）、広く大きに造りて（広く大きく造って）、南面に（南正面中央に）、大納言殿（主の大納言殿と）、大君（長女の君）、西に中の君（西側に次女の君）、

東に宮の御方と（東側に宮筋の君と）、住ませたてまつりたまへり（住まわせ申し上げていらっしゃいました）。　*「七間の寝殿」とは南正面から見て、西廂、西母屋、中央母屋、馬道、中央母屋、東母屋、東廂、と七間あって、奥行きが、廂、母屋、母屋、廂、孫廂、と五間あった、のだろうか。一応そう思って置く。

おほかたにうち思ふほどは（世間一般がちょっと思うところでは）、父宮のおはせぬ心苦しきやうなれど（宮筋の姫君は父宮が亡くなっていらして肩身が狭そうに見えても）、*こなたかなたの御宝物多くなどして（父宮や曽祖父宮などからの御遺贈品が多くあったりして）、うちうちの儀式ありさまなど（身内ごとながら諸行事へ参列する際の装束や心付など）、心にくく気高くなどもてなして（行き届いて気品に劣ること無く対処して）、けはひあらまほしくおはす（宮家筋という母娘の面目を保っていらっしゃいました）。　*「こなたかなたの御宝物多くなどして」は注に＜父蛍宮や母方の曾祖父式部卿宮から贈られた宝物。＞とある。与謝野訳文には＜祖父の太政大臣＞まで加えられている。確かに、大変な名家の姫君だ。

例の（例によって）、かくかしづきたまふ聞こえありて（このように貴家で姫君を大事に育てていらっしゃるという評判が立って）、次々に従ひつつ聞こえたまふ人多く（次々と続いて縁談を申し込みなさる人が多く）、

「内裏、春宮より御けしきあれど、内裏には中宮おはします（帝や皇太子から入内を望む御内意があるが、帝には中宮がいらっしゃる）。いかばかりの人かは、かの御けはひに並びきこえむ（誰もあの方の御威光には及ぶまい）。

さりとて、思ひ劣り*卑下せむもかひなかるべし（そうかと言って気後れして入内を自粛するのも詰まらない）。春宮には（皇太子には）、右大臣殿の女御（源殿の娘御が女御として）、並ぶ人なげにてさぶらひたまふは（他の妃を圧して入内なさっていらっしゃるのを）、きしろひにくけれど（競争相手にするのは大変だが）、さのみ言ひてやは（そうとばかりも言っていられようか）。　*「卑下す」は＜へりくだる＞という語用が多いのだろうが、此処では「思ひ劣り」が＜気劣りする、引け目に思う＞という同意語なので、下文の「思ひ絶ゆ（諦める）」に繋がる＜遠慮する＝辞退する＞くらいの語用と見たい。

人にまさらむと思ふ女子を（人並み以上だと思う娘を）、宮仕へに思ひ絶えては（入内させずに諦めては）、何の本意かはあらむ（藤原摂関家の本分が立たない）」と思したちて（と藤大納言は決心なさって）、参らせたてまつりたまふ（長女を東宮へ入内させ申し上げなさいます）。*十七、八のほどにて（十七、八の年齢で）、うつくしう（可愛らしく）、匂ひ多かる容貌したまへり（色香溢れる表情をしていらっしゃいました）。　*「十七、八のほど」は長女の年齢の明示だ。が、「君たち、同じほどに、すぎすぎおとなびたまひぬれば」と上にあったので、本文での年齢明示を尊んで長女を 18 歳、次女を 17 歳、と見て置きたい。

中の君も（次女の姫君も）、*うちすがひて（長女に並び続いて）、あてになまめかしう（上品で健康で）、澄みたるさまはまさりて（澄んだ感じは長女以上で）、をかしうおはすめれば（趣き深くいらっしゃるので）、ただ人にては（臣下身分との結婚では）、あたらしく見せ*ま憂き御さまを（惜しく見えて物足りなく思える御成長ぶりを）、「兵部卿宮の、さも思したらば（兵部卿宮がお見初

め下されば)」など思したる(などと大納言はお考えになります)。　*「うちすがふ」の「うち」は＜面対する＝対する＞の意の接頭語で、「すがふ」は＜次ぐ、追い着く、続く＞などの意らしく、「うちすがふ」は＜並び続く＞みたいな言い方のようだ。　*「ま憂し(まうし)」は「まほし(～したい)」の反対語で＜～したくない＞の意、と大辞泉に説明がある。

*この若君を(匂宮はこの大納言家の若君を)、内裏にてなど見つけたまふ時は(御所内などで見付けなさった時は)、召しまとはし(呼び寄せなさって)、*戯れ敵にしたまふ(遊び相手になさいます)。心ばへありて(利発な若君で)、奥推し量らるるまみ額つきなり(思慮深さが感じられる顔付きです)。　*「この若君」の「この」は＜当該＞の意味で上文を受けた構文の指示語用ではなく、話の主題である＜この大納言家の＞を意味する話法上の指示語用らしい。語りではなく、文として読むと、何とも紛らわしい。注には＜紅梅大納言と真木柱の子、大夫の君。大君や中君とは異腹の兄弟。＞とある。また、この文の主語は匂宮のようで、その省略も紛らわしい。　*「たはぶれがたき」と言っても匂宮は25歳と見ているので、若君は元服していたとしても12～14歳くらい、場合によっては9～11歳の童殿上(※)かも知れない、という年の差だ。「かたき」と言うより「まとはし」の語感からして、子供の世話を見てやるような印象だ。　※確たる裏付けはないが、一応は真木柱の再婚が11年前で、若君も11歳、と見て置く。(2013.2.7.)

「*せうとを見てのみはえやまじと(弟に会うだけでは物足りないと)、大納言に申せよ(大納言に言って置け)」などのたまひかくるを(などと匂宮が若君に話し掛けなさるのを)、「さなむ(こういうお話しでした)」と聞こゆれば(と若君が藤殿に申し上げると)、うち笑みて(殿は笑って)、「いとかひあり(是は手応えがある)」と思したり(とお思いになりました)。　*「せうとを見て」は注に＜以下「大納言に申せよ」まで、匂宮の詞。姉にも逢いたい、の意。大夫の君には異腹の姉の大君（東宮の麗景殿女御)、中君と同父の姉の宮の御方とがいる。匂宮は連れ子の宮の御方に関心がある。＞とある。勘違い、行き違いの話、らしい。

「人に劣らむ宮仕ひよりは(誰かに後れを取りかねない御所への入内よりは)、この宮にこそは(この第三親王に)、よろしからむ女子は見せたてまつらまほしけれ(正妻に相応しい娘を娶って頂きたいものだ)。心ゆくにまかせて(思う存分に)、かしづきて見たてまつらむに(お世話申し上げるのが)、命延びぬべき宮の御さまなり(幸いに思えるような匂宮の御人柄だから)」

とのたまひながら(と藤殿は仰りながらも)、まづ(先ずは)、春宮の御ことをいそぎたまひて(長女の東宮への入内準備を進めなさって)、

「*春日の神の御ことわりも(春日神の藤原氏の摂関家たれという御託宣も)、わが世にやもし出で来て(私の代で娘を立后出来たら)、*故大臣の(父大臣が)、院の女御の御ことを(冷泉院の弘徽殿女御姉君の立后に失敗なさった事を)、胸いたく思してやみにし慰めのこともあらなむ(無念にお思いのまま亡くなった事の慰めにもなるだろう)」と、心のうちに祈りて(と心の内に長女の立后を願って)、参らせたてまつりたまひつ(東宮に入内させ申し上げなさったのです)。　*「春日の神の御ことわりも」は注に＜以下「慰めのこともあらなむ」まで、紅梅大納言の心中。藤原氏から皇后が立后するという神託。＞とある。春日大社は藤原氏の氏神、とのこと。「ことわり」は＜判断＞。　*「故大臣の院の女御の御こと」は注に＜紅梅大納言の父、故太政大臣の娘の冷泉帝の弘徽殿女御は、源氏の養女の秋好中宮に立后された悔

しい思いがある。＞とある。

いと時めきたまふよし（入内した長女は皇太子の御寵愛が大変深いと）、人びと聞こゆ（女房たちは報告申します）。かかる御まじらひの馴れたまはぬほどに（こうした宮仕えでの社交に長女が馴れていらっしゃらないので）、はかばかしき御後見なくてはいかがとて（頼りになる御世話係りが居なくては不都合ということで）、北の方添ひてさぶらひたまへば（真木柱の奥方が長女に付き添って東宮住まいに仕え申しなさったので）、まことに限りもなく思ひかしづき（本当に何一つと行き届かぬ所の無い擁護体制で）、後見きこえたまふ（この皇太子妃をお支え申しなさいます）。

［第三段　宮の御方の魅力］

*殿は（大君が東宮に入内して、奥方がその付き添いに出仕してしまった大納言家の邸内は）、つれづれなる心地して（気が抜けた空気感が漂って）、西の御方は（特に寝殿西部屋の次女は）、一つに慣らひたまひて（長女と一緒にいる事に馴れていたので）、いとさうざうしくながめたまふ（とても心寂しく前庭を眺めて暮らしていらっしゃいます）。　*「との」は藤殿という人物ではなく、大納言邸全体の状態、特にその＜寝殿＞を指しているらしい。

東の姫君も（東部屋の宮筋の姫君も）、うとうとしくかたみにもてなしたまはで（よそよそしくは互いに接しなさらず）、夜々は一所に大殿籠もり（毎晩同じ部屋でお寝みになり）、よろづの御こと習ひ（諸々の御行儀や習字）、はかなき御遊びわざをも（生き証の歌詠みや器楽演奏までも）、*こなたを師のやうに思ひきこえてぞ（この姫君を先生のように思い申し上げて）、*誰れも習ひ遊びたまひける（長女も次女も親しく睦んでいらっしゃったのです）。　*「こなたを師のやうに」は注に＜宮の御方を師匠のようにして。＞とある。　*「たれも」は注に＜大君や中君をさす。＞とある。ここに長女が語られることで、連れ子姫が長女の入内前から大納言家の姉妹と仲が良かった、という文意になり、この連れ子姫も次女と同じように長女の入内を寂しがった、みたいな言い方になっているようだ。妙に複雑で分かり難い文で、学生なら書き直しさせられそうな稚拙さにさえ見える。ただ、それでも、連れ子姫が大納言家の姉妹よりは相当に年上らしい事が窺える話ではある。というか、さっさと年齢を明示しろ、と思う。どのくらいを想定したものか、未だに見当が付かない。真木柱と故兵部卿宮との結婚は 29 年前なので、連れ子姫が 29 歳以下なのは確かだが、長女が 18 歳として、その間では幅がありすぎる。

*もの恥ぢを世の常ならずしたまひて（この東姫は非常に恥ずかしがりでいらっしゃって）、母北の方にだに（実母の奥方様にさえ）、さやかにはをさをささし向ひたてまつりたまはず（はっきりとは滅多に御顔を向け申しなさらず）、かたはなるまでもてなしたまふものから（不都合なことでもあるのかというほどの態度でいらっしゃるものの）、心ばへけはひの埋れたるさまならず（考え方や暮らしぶりに引っ込み思案な事はなく）、愛敬づきたまへること（表情豊かでいらっしゃることは）、はた、人よりすぐれたまへり（また人並み以上でいらっしゃいました）。　*「もの恥ぢを」は注に＜主語は宮の御方。以下、宮の御方の性格描写が続く。＞とある。この東姫の人物像やその肉付けには興味があるが、主語省略や話の進め方は分かり難い。

かく、内裏参りや何やと（このように長女の入内や何かと）、*わが方ざまをのみ思ひ急ぐやう

なるも(自分の娘の手当てだけを考えて対処しているようなのも)、心苦しなど思して(藤大納言は気懸かりにお思いになって)、　*「わが方ざま」は注に＜主語は紅梅大納言。＞とある。文意から分かるが、文脈上で新たに登場する人物が明示されないままの主語省略というのは、本当に気が知れない。語りだと、語り手の間とか抑揚などでそれなりに伝わるのだろうか。

「さるべからむさまに思し定めてのたまへ(どういう結婚がお望みかお決めになって仰って下さい)。同じことととこそは(実の娘と同じように)、仕うまつらめ(東姫の御世話も致しますので)」

と、母君にも聞こえたまひけれど(と母君である奥方にも申し上げなさったが)、

「さらにさやうの世づきたるさま(あの娘は一向にそのような世慣れた向きは)、思ひ立つべきにもあらぬけしきなれば(気が回らないような様子なので)、*なかなかならむことは(変に一人前に結婚させると言うのも)、心苦しかるべし(気が重い話でしょう)。　*「なかなかならむ」は＜なまじ一角に見做す＞または＜意外に出来が良い＞。此処では＜変に結婚させる＞。「なかなか」は今でもよく使う含みの多い語で便利だし、その主旨は大体察しが付くものだが、含みが多い事が深い味を出す語感であり、それを意図した語用でもあるので、中身を絞って言い換えるのは難しい。が、古文では主語も対象も省略される場合が多いので、その辺は補語しないと現代語文として成立しない。

御宿世にまかせて(独身人生という姫の御宿命のままに)、世にあらむ限りは見たてまつらむ(私が生きている限りは面倒を見て差し上げようと思います)。後ぞあはれにうしろめたけれど(私の没後はどうなるかと心配されますが)、世を背く方にても(出家という生き方も有りますので)、おのづから人笑へに(そのまま情けなく)、あはつけきことなくて(軽はずみな男関係など無しに)、過ぐしたまはなむ(お暮らしなさるでしょう)」

など、*うち泣きて(などと奥方は姫が男親に死に別れた不遇に涙ぐんで)、*御心ばせの思ふやうなることをぞ聞こえたまふ(娘の気立てが良い事を夫に申しなさいます)。　*「うち泣きて」は＜涙ぐんで＞。だが、大納言に気兼ねして、連れ子の結婚の世話を辞退するような真木柱奥方の慎ましい物言いには、男親を失った娘の不憫さが滲む、ということなのだろう。　*「御心ばせ」の「御」の読みは「おおん」ではなく「み」とある。東姫に対する話者の敬意で＜姫の御性格、御考え方＞のこと、らしい。「思ふやう」は＜理想的＞ということで、奥方による姫の評価ではあるらしいが、此処では一般的に＜素直で問題が無い＞という語用なのだろう。独身で良い、というのは慎ましく謙遜した言い方であって、本心は、素直な良い娘なので宜しくお願いします、という意味だ。この手の言い方は今でもある。というか最近は、食品加工技術や物流経済が発達して、食物消費は物理的には個人消費なので、個人生活に便利な商品開発が進んで、謙遜ではなしに本気で「独身で良い」という言い方をする向きもあるようだが、また変な人間関係で人生が台無しになる事は実際に有るので、後ろ向きの言い方として「独身で良い」という考え方は古典的にあるが、個人自身が物理的に一過性の形態存在であることを認識すれば、気楽に生きることと、種の保全を担うこととが両立する解を求める、のが正しい考え方に違いない。

いづれも分かず親がりたまへど(藤殿は自分の子も嫁の連れ子も分け隔てなく親らしく見せようとしなさるが)、御容貌を見ばやとゆかしう思して(東姫のお顔立ちを見たいとお思いになって)、「隠れたまふこそ心憂けれ(隠れていらっしゃるので分からない)」と恨みて(と不服に思っ

て)、「人知れず(こっそりと)、見えたまひぬべしや(拝見できないものか)」と、*覗きありきたまへど(と興味深く東部屋を覗き見して歩き回りなさるが)、絶えてかたそばをだに(全く片鱗すら)、え見たてまつりたまはず(お見掛け申しなされません)。　*「のぞきありく」は殿が姫の女っぷりを見ようとする男心。「いづれも分かず親がりたまへど」が冗句だという明示でもある。親として姫と面対するなら女房たちを侍らせて公明正大に儀式を設ければ良い筈だ。そういう気持ではない、のだろう。藤殿が匂宮に嫁がせるのを西姫に想定した、というのは、こういう下心があってのことだったらしい。

「上おはせぬほどは(母上がいらっしゃらない時は)、立ち代はりて参り来べきを(私が代わってお部屋をお訪ね申しますが)、うとうとしく思し分くる御けしきなれば(よそよそしく分け隔てなさる御態度なら)、心憂くこそ(残念です)」

など聞こえ(などと申し上げ)、御簾の前にゐたまへば(藤殿が東姫の御簾の前にお座りなさると)、御いらへなど、ほのかに聞こえたまふ(お返事などをか細くなさいます)。御声けはひなど(その御声や素振りなどが)、あてにをかしう(上品で情緒があり)、さま容貌思ひやられて(姿や顔立ちが素晴らしく思い遣られて)、あはれにおぼゆる人の御ありさまなり(印象的に感じられる姫のご様子です)。

わが御姫君たちを(藤殿は自分の姫君たちを)、人に劣らじと思ひおごれど(人に劣る事は無いと自負なさっているが)、「この君に(この姫には)、えしもまさらずやあらむ(適わないかもしれない)。かかればこそ(これだから)、世の中の広きうちはわづらはしけれ(世の中は広いって言うんだ)。たぐひあらじと思ふに(負ける筈が無いと思っても)、まさる方も(それ以上の人が)、おのづからありぬべかめり(必ず出て来てしまうんだなあ)」など、いとどいぶかしう思ひきこえたまふ(などと、ますます興味深くお思い申しなさいます)。

[第四段　按察使大納言の音楽談義]

「月ごろ(この数ヶ月)、*何となくもの騒がしきほどに(入内準備で、何かと物騒がしかったので)、御琴の音をだにうけたまはらで久しうなりはべりにけり(あなたの御琴の音すらお聞き出来ずに久しくなってしまいました)。　*「何となく」は判然としないものを漠然という言い方ではなく、言い出せば個別に具体的に上げられるが、その特定の個別事情ではなく、それら多くの事柄が起こった長女の東宮入内についての＜あれこれという全体の事情＞をいう言い方、だろう。

西の方にはべる人は(西部屋の娘は)、*琵琶を心に入れてはべる(琵琶が気に入って)、さもまねび取りつべくやおぼえはべらむ(上手くなりたいと思っているようです)。なまかたほにしたるに(まだ下手なので)、聞きにくきものの音がらなり(酷い音色です)。同じくは(折角なので)、御心とどめて教へさせたまへ(宜しく手解きして頂きたい)。　*「びわ」は注に＜中君は宮の御方から琵琶を習っている。『源氏物語』では琵琶は皇族の血を引く人がよく弾く楽器として登場。源典侍、明石御方、蛍兵部卿宮、宇治大君など。＞とある。

翁は(おきなは、老人のこの私は)、とりたてて習ふものはべらざりしかど(特に是と言って習

った楽器はありませんでしたが)、そのかみ(その昔)、盛りなりし世に遊びはべりし力にや(若い時に蔵人公務で楽奏や演舞を致しましたお蔭でしょうか)、聞き知るばかりのわきまへは(演奏の上手い下手を聞き分けるくらいの素養は)、何ごとにもいとつきなうはべらざりしを(一通りは全く備えが無いものでもございませんので)、うちとけても遊ばさねど(近くでお弾きにはなりませんが)、時々うけたまはる御琵琶の音なむ(時々お聞き致しますあなたの琵琶の音色には)、昔おぼえはべる(昔の華やかな宴席の頃が思い出されます)。

故六条院の御伝へにて(故六条院の御伝授によって)、右の大臣なむ(右大臣の源殿が)、このころ世に残りたまへる(今の琵琶の名手を引き継いでいらっしゃいます)。*源中納言(薫君や)、兵部卿宮(匂宮は)、何ごとにも、昔の人に劣るまじう(どんなことでも昔の達人に並ぼうという)、いと契りことにものしたまふ人びとにて(特別な星の下に生まれなさった人たちで)、遊びの方は(音曲については)、取り分きて心とどめたまへるを(特に熱心でいらっしゃるが)、手づかひすこしなよびたる撥音などなむ(手つきが少し柔らかすぎる撥の音などは)、大臣には及びたまはずと思うたまふるを(源殿には及ばずにいらっしゃると存じますが)、この御琴の音こそ(あなたの撥の音は)、いとよく*おぼえたまへれ(とても良く故六条院に似ていらっしゃいます)。　*「源中納言(げんちゅうなごん)」は薫君らしい。匂兵部卿巻末では宰相中将だったが、いつ＜中納言＞になったのか(※)。それも行き成りの登場で、しかも本人ではなく、藤大納言の発言の中で話題に取り上げられているだけだ。いや、話の話題になる事自体はあって良いんだが、薫君は続編の主人公らしいのに、中納言に至る本人自身の描写がほとんど無いままに、このように詳しい他家の話が始まり、その中で話題に上がる、という人物像の説得力の無さは、私があまりに当時の事情を知らない読者だから、とばかりも思えない。何だか無闇にやたら振り回されて、ワケが分からない気分だ。　※「中納言になった」ことは竹河巻五章一段にあるが、「いつ」については椎本巻二章一段に再び薫君の中納言昇進が語られるまでの経緯から＜23 歳の秋＞と推定される。などと自問自答ノートを記すのも妙な気分だ。(2013.3.8.)　*「おぼゆ」は自動詞だと＜想起される＝面影がある＝似ている＞という語用がある、と古語辞典にある。文脈からして＜故六条院に似ている＞ということらしい。

琵琶は、*押手しづやかなるをよきにするもの*なるに(琵琶は左手の押し弦で音を静かに揺らすのが良いものなので)、柱さすほど(柱押さえをするたびに)、撥音のさま変はりて(撥で弾いた絃の音色が趣を変えて)、なまめかしう聞こえたるなむ(情緒豊かに聞こえるのが)、女の御ことにて(女手であなたがお弾きになる弦楽器と知り)、なかなかをかしかりける(実に感心致します)。いで、*遊ばさむや(さぁ、弾いて下さいませんか)。御琴参れ(女房たちよ、姫の楽器を持ってまいれ)」　*「押手」は「おして」または「おしで」で＜琵琶・箏(こと)などを弾く際に、左手で弦を押して音を変化させること。また、その手。＞と大辞林にある。ところで、琵琶はギターと同じリュート系の楽器という説明をよく目にする。確かに形状や奏法などで、実物を知らない私などが写真や図で推し量る限りでも、基本的に同根を思わせるに十分だ。が、これも多くのサイトで指摘があるようだが、西洋や中国で改良された方向性と日本で残された継承性とで、この弦楽器が示す音楽性は全く異なるもののようだ。私は個人的に馴染みのあるギターで自分なりの解釈に努めたいが、ギターは概して、弦高を低く設計して、フレット配置を半音に設定して、「押手」は音階の変化を実現する事が主要な目的だ。が、琵琶は箏のように弦高が高く、フレット(柱、ぢ、ぢう、ぢゅう)は全音かつ最少設定で、「押手」は弦の張力変化で音を揺らす事が主要な目的、らしい。ギターで言うチョーキングだが、凡そ音階音楽と情調音楽とでは、その手法の意味合いは違うのだろう。　*「なるに」の「に」は理由提示の格助詞を下文に接続語用している、のだろう。　*「あそばす」は一般に《動詞「あそぶ」の未然形＋尊敬の助動詞「す」から》＜「す

る」の尊敬語。＞と大辞泉にあり、平安時代には＜遊猟・音楽・詩歌など、遊芸をする意の尊敬語。＞と古語辞典にある。「む」は意志の助動詞、「や」は呼び掛けの間投詞で、「むや」は＜～しませんか＞。殿と東姫の立場関係からすれば、丁寧な言い方ながら実質では命令だ。

とのたまふ(と藤殿は東姫に仰います)。女房などは(部屋付きの女房たちは)、*隠れたてまつるもをさをさなし(姫を殿からお隠し申そうとする者も無く、演奏会の準備に立ち働きます)。いと若き上臈だつが(とても若い姫付きの側近女房らしき者が)、見えたてまつらじと思ふは*しも(姫をお隠し申し上げようとするように)、*心にまかせてゐたれば(命に服さず勝手な判断をしていたので)、「*さぶらふ人さへかくもてなすが(使用人までこのありさまとは)、やすからぬ(先が思い遣られる)」と*腹立ちたまふ(と立腹なさいます)。　*「隠れ奉る」は＜姫をお隠し申し上げる＞。*「しも」は意外性の強調か。この期に及んで、とか、殿の命に反して、とか言う意味合いだろうか。藤殿が不満そうな文意は伝わるが、部屋女房や姫付き女房の様子などの説明が是までに一切無いので、具体的な邸内事情は分からない。　*「心に任す」は＜勝手に判断する＞。やはり藤殿の不満は邸内で自分の命に従わない者が居る、ということだろうか。一応、左様に補語して置く。　*「さぶらふ人さへかくもてなすが」は正に＜使用人さえ言う事を聞かない＞という藤殿の不満だが、姫付き女房は故兵部卿宮邸からの付き人だっただろうに、それらの人びとと姫や母真木柱や父兵部卿宮などとの縁故に全く説明が無いので、配役心情に於ける此処の文の説得力も無い。当時の読者は、此処の配役に投影された実際の宮中人物の諸事情を想起しながら面白く読めたのかもしれないが、私には分からない。　*「腹立ちたまふ」は是が艶笑譚であることの念押しみたいな語り口だ。姫付き女房は殿の魂胆に気付いている。それを見抜かれている事が、殿には何とも間が悪い。不機嫌を装って誤魔化すしか無い。是は今でも現実に良くある光景で、良くある舞台演出だ。